

待望の赤ちゃん誕生。でも、その赤ちゃんにあざがあったら？ 治療ができるのか、学校でいじめられないかなど不安になるかもしれない。赤ちゃんに多いあざとその治療について解説します。

知いたい！ 治療の最前線

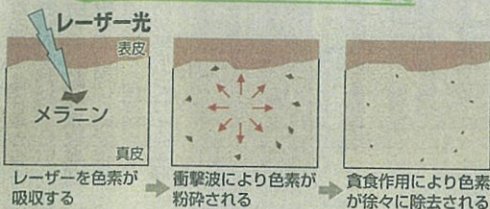
赤ちゃんのあざ

一口メモ

赤ちゃんに見られるあざには赤あざ、青あざ、茶あざがある。あざのタイプにより治療が必要になるかどうかが変わるが、多くはレーザーが有効。レーザーはあざの色の原因となるターゲットに選択的に吸収されるため、正常組織へのダメージを最小限に抑えて治療を行うことができる。

レーザー治療が有効

レーザーがメラニン色素を排除する仕組み



三澤 恵

富山大附属病院皮膚科
診療准教授

赤ちゃんの赤あざはその色により赤、青、茶の3タイプに分かれます。赤いあざは局所的な血管の拡張や増殖によって起こります。生後まもなく生じ、盛り上がり、6歳ごろまでに徐々に小さくなりますが、時に緩みが残ります。まぶたに生じると目をぶささで弱視を起す

ことがあります。巨大なもの発生部位によっては気道をふさぐ、授乳が困難になるなどの機能障害を起します。リスク減らす

これまで乳児血管腫は治療せずに様子を見るのが主流でしたが、最近積極的にレーザー治療や内服療法が行われます。赤あざ治療に用いる色素レーザーは、色の原因となる血管内の赤血球に選択的に

吸収される波長を用います。正常組織へのダメージを最小限に抑え、ターゲットの血管のみにダメージを与えます。治療により赤みを早く無くし、最終的に残る皮膚の緩みなどのリスクを減らすことができます。機能障害のリスクが高い場合などはプロパノロール内服療法を行います。プロパノロールは元来心臓に対する薬ですが、乳児血管腫への

組織のダメージ最小限

0.3年から乳児血管腫に保険適用となりました。一方、生まれきの平らな赤あざもあります。これは毛細血管奇形（単純性血管腫）です。眉間、額の真ん中、まぶたの内側、人中、鼻と上唇の間にあるくぼみなどに見られるものは生後1〜2年以内で消えるのが特徴です。それ以外の場所に生じた場合は自然には消えませんが、色素レーザーによる治療を行います。

多くの日本人の赤ちゃんのお尻には青いあざがあります。これは蒙古斑です。蒙古斑は徐々に薄くなり、多くは

10歳前後までに消えます。この蒙古斑がお尻以外の場所にできることもあり、異所性蒙古斑と呼ばれます。異所性蒙古斑も薄いものは成長とともに消えますが、色が濃い場合は完全に消えしません。

また、顔や目の周り、頬に青あざがみられる場合は太田母斑かもしれません。太田母斑は生後半年以内に徐々に青みが出てくるのが多く、思春期に色が濃くなる場合もあります。また、白眼のところに青色の色素斑がみられることもあります。

性蒙古斑の色の濃いものと太田母斑です。これらの青あざの色の原因は真皮のメラニン色素です。富山大附属病院ではメラニン色素によく反応する波長のレーザー（Qスイッチチルビールレーザー、Qスイッチアレックスレーザー）を使用して治療を行っています。レーザーを照射するとメラニン色素が吸収し、レーザーの衝撃波によって色素が粉砕されます。粉砕されたメラニン色素は生体が持っている異物を排除する仕組み（貪食作用）により色素が徐々に除去されます。

茶色いあざは扁平母斑と呼ばれる、自然には消えないあざです。表皮にメラニン色素が多いために、周りの皮膚より茶色の

く見えます。治療の場合には青あざと同じくメラニン色素に反応するレーザーを用います。しかし、扁平母斑の治療効果はかなりの個人差があります。レーザーを1回照射するだけできれいに色が消える場合もありますが、レーザー照射後に逆に色が濃くなり、また場合もあります。

メラニン粉砕

レーザー照射前には治療効果を予測することはできないため、あざの一部に試し打ちを行い、その結果から今後レーザー治療を行うかどうか決めるのがよいでしょう。

の効果が判明し、2

治療が必要となるのは異所

次回10日に掲載します。